

## 戦禍の記憶を未来につなぐ

中野 理恵

1945年3月10日深夜0時過ぎ、米軍機に爆撃された東京は面積の4分の1が焼失し、10万人以上の犠牲者を出した。本作は日本在住15年になるオーストラリア人のエイドリアン・フランシス監督が、爆撃から生き延びた被害者についての公的な慰霊碑や博物館の建設、市民への補償を求めて闘い続ける人々への証言を中心に、当時のニュース写真や映像等を交えて構成したドキュメンタリー映画である。語る人々の年齢は80歳を過ぎているが、どの人も記憶が鮮明である。

爆撃の対象となった地域は住宅密集地だった浅草など下町が中心だった。当時16歳だった築山実さんの住まいは現在の江東区森下5丁目。標的になるような施設が近くになかったために安全だ、と信じていたところを爆撃され、3人の兄弟を一度に失ってしまった。築山さんは通りを歩きながら「この辺だろうか、上だったねえ、枕木が丸見えなんですよ。それが燃えて落っこってきた」と当時を思い起こし、ドイツなどとは異なり空爆で亡くなった人の記録が残されていないと聞き驚く。

「伝えられることがあったら伝えたい」と集まった人々の前でマイクを手に語る清岡美知子さんは、当時21歳だった。爆撃で地域全体が炎に包まれる中を隅田川に逃れたが、まだ3月。冷たい水の中につかり迎えた夜明けに目に入ってきたのは、自分の周りにあった多くの死体だった。

「敗戦の年、14歳、空襲はよく覚えている」「立派な防空壕に逃げ込んだ人は皆窒息死」と語る星野弘さんは「野蛮極まりない爆撃だけど、そんなことは言ってもらえない、日本が仕掛けた戦争なんだから。だけど当時の民間人はそんなことを知らない」「倒れた人、天涯孤独となった民間人には



©2021 Feather Films Pty Ltd, Filmfest Limited

日本政府は一円のお見舞いも出してない」「その不条理を提訴したが負けた。だが街頭で語り、署名を集め平和を守るために頑張る、力を貸して欲しい」と訴える熱意は半端ではない。彼らは犠牲者の名を789名まで調べ、和紙に毛筆で一名ずつ書き、「永久に保存してもらおう」と語り合う。

全国空襲被害者連絡協議会の席上で、小林節慶応大教授による「軍人は覚悟して戦争に行くが民間人は違うどころか、〈戦争は怖くない〉とマインドコントロールされた」「当時を否定できる政治家と役人にならないと変わらない」との言葉はあきらめにも励ましにも聞こえるが、当時9歳で〈両親とオジー一家7人を失くした〉小林和子さんが「法案を通さなくては」と主張する言葉は強い。

記憶は記録しないと消えてゆく。広島原爆ドームが当時のままであるために、敗戦から78年経った今も、そしてこれからも原爆禍が記憶から消えることはないだろう。1945年以後も朝鮮半島、ベトナム、パレスチナ、そして今ウクライナで戦争は続き、かけがえのない命が失われていく。本作を見て〈過去に学ばない〉権力者の愚かさを思った。

### 《Cinema Information》

#### 『ペーパーシティ 東京大空襲の記憶』

オーストラリア映画(80分)／監督：エイドリアン・フランシス／2月25日(土)よりシアター・イメージフォーラムにて公開

なかのりえ：映画プロデューサー、ディストリビューター。(株)パンドラ代表。『ハーヴェイ・ミルク』を第1回配給作品として、これまでに100本を超える映画を配給し、視覚障がい者のための副音声付商業劇場上映を日本で初めて実現。著書に『すきな映画を仕事にして』(現代書館, 2018)等。